白線のみ残るトラック風涼し

「負けるにしても、子供が納得のいく負け方をさせてやりたい。」

運動会前々日の職員打合せ会での体育主任の一言。これに職員がうなずく。話題は、全校競技「ひがしっ子　竹取物語」である。全校児童が紅白に分かれ、七本の竹を自陣に引き込む。その際、残りわずかとなった竹に子供が殺到した段階で、あるいは竹にしがみついている子が転んで引きずられそうになった段階で、危険を回避するため、練習では指揮者の教師が競技終了の雷管を鳴らすことにしていた。前出の体育主任の言葉は、子供が全力を出し切る場を確保したいとの願いからくるものであった。

そこで、竹の断面で腹部を打つことを避けるため、竹は横からつかむことを子供に再確認すること、引率教師が危険な状況に個別に対応することとし、指揮者は状況を見極めることにした。

迎えた本番。上学年の部で引きずられる子供が現れた。だが、その子は体勢を立て直して果敢に立ち向かった。再び引きずられて相手陣の瀬戸際に来たが、決着がつくまであきらめなかった。食い入るように見つめる観客から歓声が湧く。同様の状況が随所で繰り広げられ、延長戦を終えると、「迫力あるねえ。」「勝敗に関係なく、見ごたえがある。」と、感嘆の声が聞こえてきた。

学区民参加の競技「チーム対抗綱引き」も白熱した。競技開始前から、どのチームも気迫に満ちていた。そして、本気で行うことが競技を楽しむことである、一生懸命になることは格好良いことだと、姿を通して子供たちに教えてくださった。

学区の支援、保護者の理解、教師の願いが合致し、子供が体験から学ぶことの多い、充実した学区合同運動会となった。

本番で練習の成果を存分に発揮した子供。だが、それは頑張りのほんの一端でしかない。全校競技の進行練習では、指示を集中して聞き、短時間で習得した。「ひがしっ子　竹取物語」や「チーム対抗リレー」では、六年生のリーダーが中心になって仲間と勝つための作戦を考え、采配を振るった。下学年の表現演技は三年生が手本を示し、上学年は、どうしたらより良くなるか、考えや思いをもって練習に臨んだ。運動に苦手意識をもつ子も逃げることなく精進し、準備や片付けを進んでした。

心身を鍛えた子供には、六月は専門家から学ぶ特別な授業を準備している。三年生の花育の授業、五・六年生の心肺蘇生法講習会、六年生の租税教室、全学年のメダカの授業、体験型防犯教室、造形教室、岡崎城大河ドラマ館の見学等がそれである。水泳や「こつこつ読書週間」も始まる。梅雨入りしても、頭と心の活動量たっぷりの六月になるだろう。